

「リスクコミュニケーション」特集にあたって

ふし わき ゆう いち
伏 脇 裕 一†

「安全工学誌」に掲載されている原著論文や解説記事等の多くは科学の中でも化学系の視点から執筆されたものであり、伝統的に、工学的な「技術」の観点から安全について考え、安全向上のための対策などを提案してきた。

近年の安全工学誌では工学的技術にとどまらず、その技術の適正な運用を下支えする「安全文化」等についても活発に議論されている。しかしながら安全文化の議論は主として企業内部の安全への取り組みや意識に関するものである。企業の安全文化を評価するための観点のひとつとして、事業所周辺住民とのコミュニケーションの状況も取り上げられてはいるが、コミュニケーションそのものについて考察対象とするものではない。

一方、日本では特に東日本大震災以来、工学的技術や企業内部の取り組みに関することだけで安全について考えることはできなくなっている。原子力発電所、化学プラント、環境、化学物質、食品、製品といったものに付随する様々なリスクについて、製品・サービスなどの提供者側が、リスク評価して一方向的に発信するのではなく、リスク情報の受け手側の感じ方・考え方を知ること、双方で意見交換すること、信頼関係を醸成すること、情報の提供者側と受け手側双方がともに成長すること、そしてそれらの結果をフィードバックして製品・サービスの質や安全性の向上に生かすことが必要になっているのではないだろうか。特に、リスク情報の提供の際は、誰に向けて何を伝えるか、相手に何を期待するか等の目的を明確にすること、そしてそれを参加者と共有することが重要である。安全工学誌の主たる読者層である化学メーカーもこれらの話題に多大な関心を寄せているところである。

リスクコミュニケーションを促進していくためには、市民がそのリスクについて関心を高め、リスクコ

ミュネーションが自分たちを取り巻く環境の改善につながると意識づけを行うことが必要になってくる。現実的には、リスクコミュニケーションとされている事例においても、関係者の間でリスクに関する対話が十分に成立している例は少なく、現状ではまだ形式的なものが多い。そこで、より実践的なリスクコミュニケーションを発展させていくための努力が必要である。

以上のことから安全工学誌 2019 年の特集号のテーマとしてリスクコミュニケーションを取り上げ、読者にリスクコミュニケーションに関する基本的な知識や事例を提供することを企画した。

具体的なテーマ内容を見ると、化学物質管理、化学プラント、災害関連に加えて、「食と農」「消費者とモノ」「企業不祥事」「情報セキュリティ」など他の学術分野にまで視点を広げた内容となっている。更に、リスクの伝え方だけではなく、コミュニケーションそのものとのらえ方と有能なコミュニケーター育成の方法なども紹介され、ネットやマスコミなどのメディアの影響についての実態の解説やその対策についての提案も盛り込まれている。また、日常的に簡便に活用できるリスクマネジメント手法の紹介、化学系企業を事例として簡便な組織と個人のリスクへのセンス度の診断法や企業としての対社会に対するリスクコミュニケーション手法なども織り込まれている。

安全工学誌には 2017 年の第 2 号（4 月発行号）まで「災害予防と環境保全の技術」というサブタイトルをつけていた。しかし近年の社会状況や学術の状況を鑑みてそのサブタイトルを外し、技術に限定せず広く安全に関する話題を掲載する取り組みを始めている。今回の特集号を企画するにあたっては、読者にリスクコミュニケーションに関する基本的な知識や事例を提供するだけでなく、安全工学誌として新たな領域に踏み出して幅を広げ、より一層の社会貢献ができるよう成長する契機にしたいと考えている。

† 東京聖栄大学 健康栄養学部：〒 124-8530 東京都葛飾区西新小岩 1-4-6